伊吹山文化資料館が「廃校リニューアル50選」に　［伊吹町］

全国では、過去10年間に2,125校の公立学校が廃校になっています。文部科学省は、地域の財産として有効活用を図ることを目的に、廃校活用に積極的に取り組んでいる事例50件を全国から選定しました。

50選には、特産品販売施設・体験型の工房・ベンチャー企業への貸与・NPOの活動拠点・賃貸住宅など、特色ある活用がみられますが、滋賀県からは、唯一「伊吹山文化資料館」が選ばれました。

〝学校から資料館へ〟という道筋は、全国的にも多い再利用法です。当館が選ばれたのは「町民（友の会）が積極的に運営に参画することにより、活動プログラムの充実を図っている」という点が、先進的かつ特色ある取組みとして評価されたものです。

最大の特徴は、現在26名の「資料館友の会」の活動です。開館のための計画、展示は手作り。開館後は、総合学習で訪れる子どもたちに対する講師役、来館者に対する伊吹の自然・文化の情報発信。絶えたことのない館内外の花々は、定期清掃時や四季折々に家や山野の花を持ち寄っていただいているおかげです。

資料館を町の財産にし、伊吹文化を次世代に伝えていこうとする活動が、開館以来資料館を支えてきました。

雪の多い伊吹の１月。資料館は子どもたちの歓声で賑やかです。小学校３年生が「くらしの移り変わり」を学ぶ時期で、石臼できな粉挽き、洗濯板体験、火のしのアイロン、縄ない、竹のおもちゃ作りなど、展示資料を使って、友の会の皆さんが、ひとむかし前の暮らしを教えてくださいます。　（髙橋順之）

▲縄をなう子どもたち

情報ＢＯＸ

◆伊吹町上平寺・弥高・藤川地先に所在する「京極氏遺跡―京極氏城館跡・弥高寺跡」が、平成16年２月27日に国の史跡に指定されました。是非お越しください。

◆平成14年に行ったシンポジウムを集録した下記の書籍がサンライズ出版（彦根市）から発行されました。
『京極氏の城・まち・寺～北近江戦国史』伊吹町教育委員会編
定価 1,300 円　　※県内の書店で発売中

◆伊吹町教育委員会では、県教委と共同で下記の冊子を発行しました。
近江歴史探訪マップ２
『乱世を生き抜いた江北の雄～京極氏の足跡を訪ねて』
※国史跡「京極氏遺跡」の詳細と、県内外の京極氏関連遺跡を写真や図面で紹介しています。マップつき。

◆伊吹町では、伊吹山地のほ乳類・鳥類・植物の基礎調査を簡単に紹介した下記のパンフレットを作成しました。
「いぶきの野生動物」

◆伊吹町弥高区では、山岳寺院弥高寺とともに歩んだ歴史と文化を紹介した下記の字史を発行しました。
『弥高のあゆみ　彌高物語』（Ａ５判、300頁）
※国史跡弥高寺跡の歴史や広大な範囲の遺跡の詳細と伝承が紹介されていて、山岳寺院研究にも役立ちます。後半に町の調査報告書も再録しました。

◎問合せ先
伊吹山文化資料館
〒521-0314 滋賀県坂田郡伊吹町春照 77
TEL0749-58-0252

情報ＢＯＸ

◆山東町立柏原宿歴史館では、柏原出身の映画監督にスポットを当てた企画展「吉村公三郎と吉村家の人々」の図録を発行しました。　好評発売中（1,500円）

◎問い合せ・申込み先
柏原宿歴史館　TEL0749-57-8020

◆山東町教育委員会では、中山道の宿場であった柏原宿地区の町並み調査報告書を発行しました。
『山東町・柏原の町並み』

◎問い合せ先
山東町教育委員会　TEL0749-55-8110

◆◆編集後記◆◆

年度末という文化財担当者らしい発行日の19号です■おまけに情報ＢＯＸ欲張ったら大好きな編集後記のスペースがなくなった‥■三町合併まであと２号の予定です（シャンギリっ子）

坂田郡文化財ニュース
佐　加　太　第19号
発　行　平成16年３月31日
編　集　坂田郡社会教育研究会文化財部会
事務局　〒521-0314　滋賀県坂田郡伊吹町春照37
伊吹町教育委員会生涯学習課
TEL. 0749(58)1121
印　刷　立木印刷

坂田郡文化財ニュース
佐加太

第19号
２００４年３月31日
滋賀県坂田郡社会教育研究会
文　化　財　部　会

佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

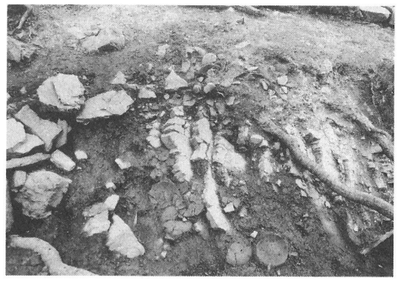
礎石建物２棟を検出 ― 太尾山城跡 ―　［米原町］

昨年の夏より開始した太尾山城跡の発掘調査が終了しましたので、その成果について報告します。

太尾山城跡はＪＲ米原駅の東側にそびえる標高 254m の太尾山頂に位置する戦国時代の山城で、北城と南城の二城から構成されており、このうち今年度は南城で調査を実施しました。

南城の最高所は 12×10m の規模であり、曲輪ではなく、櫓台と見られます。調査の結果、２間×３間の礎石建物が検出されました。おそらく物見櫓の遺構と考えられます。なお、この礎石建物の周辺からは16世紀後半の土師器皿が出土していますが、すべて口縁部に煤が付着しており、灯明皿に用いられていたようです。夜を徹して国境を監視していた緊迫した状況がうかがえる遺物です。

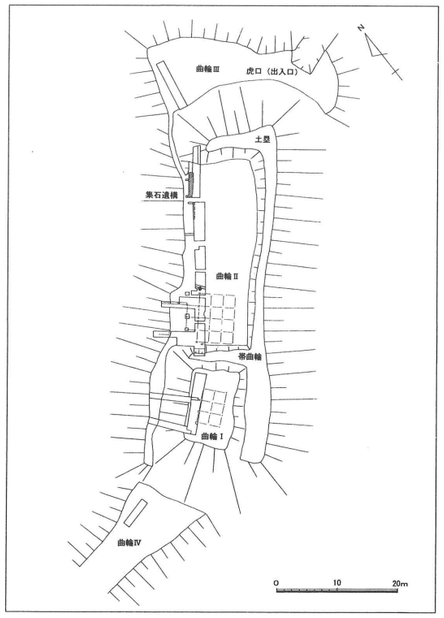
この櫓台の北側一段下方に36×14m の曲輪Ⅱが位置しています。ここが主郭に相当する曲輪と考えられます。北辺と東辺には土塁が巡らされており、曲輪の南部で４間×４間以上の礎石建物が検出されました。この建物の外縁部には列石が敷かれており、土壁造りであったと考えられます。また、北辺からは雨落ち溝と見られる溝状遺構も検出されており、ここからは一括で投棄された土師器皿が出土しています。これらは櫓台出土のように煤は付着しておらず、飲酒に用いられたものと考えられます。さらにこの礎石建物周辺からは瀬戸美濃産の天目茶碗・擂鉢・皿、越前産の擂鉢、中国産の白磁端反皿なども出土しており、この建物が居住施設であったことがうかがえます。



▲太尾山城跡Ⅱ郭雨落溝の土器出土状況

検出された礎石建物は一間が六尺五寸という規則正しい寸法で、作事には番匠といった専門の大工集団が加わっていたことがうかがえます。

「中嶋宗左衛門尉直頼書状」（『大原観音寺文書』）には、「太尾門矢蔵之用、上野より材木三本召寄候云々」とあり、太尾山城の門や櫓に伊吹町上野の材木が用いられていたことが知られます。（中井　均）



▲太尾山城跡調査平面図

坂田郡の天然記念物⑦

樹木づくし

［山東町］

今回は、山東町の天然記念物に指定されています樹木を紹介しましょう！

【八幡神社杉並木:西山】

70段余りの急な石段の両側にそびえ立つ、樹齢400年以上といわれる17本の薩摩杉。この並木は、長浜城主の頃よりこの神社を崇敬していた豊臣秀吉が大阪に移ってからも安産の祈願をしたところ、秀頼が生まれたので、そのお礼として植えられたのが現在の杉並木になったとされています。壮観の一語に尽きます。

【公孫樹（いちょう）:長岡】

長岡神社の鳥居前にそびえ立ち、樹齢数百年を数える公孫樹。幹周り6.75m、樹高は30mをゆうに超える巨木です。幹の中程に「銀杏の乳」と呼ばれるこぶが垂れ下がり、時代の流れを感じさせます。

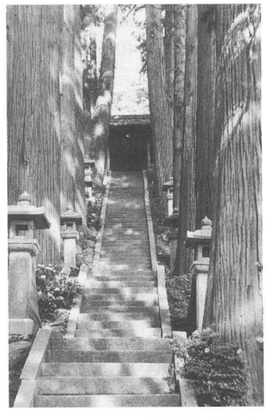
【柏槙（いぶき）:清滝】

徳源院へ向かう右手に、枝が垂れ下がり、樹の内部は空洞化しながらも青々としたいぶきの老樹がそびえ立つ。幹周り4.8m、樹高約10mをはかり、樹齢は700年を超えるといわれています。

この樹は、この地を治めた京極氏が伊吹山より一株の苗木を投げ、その飛んだところを墓地に定めようとしたところ、ここまで飛んできたのがこの樹といわれています。現在の地は、京極八世の高光が建てた勝願寺の境内があったところ。因みに、京極家の菩提寺である清滝寺徳源院は目と鼻の先にあります。

【欅（けやき）:西山】

西山集落の南端、王街道と呼ばれる地にそびえる老樹です。幹周り7.3m、樹高11mをはかり、樹齢は700年を超えるといわれています。楓は台風などで折れ、樹の内部は空洞化していますが、数百年の星霜をしのばせる迫力と風格が感じられます。　（桂田峰男）



▲八幡神社杉並木

曲谷の石切り場跡

［伊吹町］

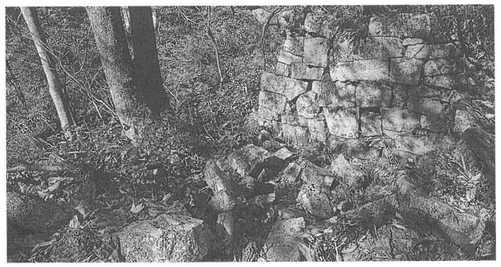
曲谷集落の北東の山中には、石材加工に適した花崗岩の岩床があります。曲谷では、昔からこの石を利用して石塔や石仏、石臼などを作ってきました。町内一の名瀑「五色の滝」周辺も石切り場のひとつで、作業小屋や切り出した跡、未製品の石材などが散在しています。

集落内の円楽寺に「西仏房」の石像があります。もとは、木曽義仲の祐筆として活躍した覚明という人物で、曲谷に逃れて花崗岩の岩床を発見し、木曽から石工を連れてきて技術を伝えたといわれています。

集落内の石造品をみると、白山神社の2基の板碑は、1310～1330年頃の作といわれています。境内の宝篋印塔の笠や台座は南北朝時代のものです。このころには石材加工が始まっていたものと考えられます。その後、五輪塔や石仏を作り、石臼作りは戦国時代から始まったようで、上平寺城下や鎌刃城・小谷城から出土しています。石臼が生産の中心になったのは江戸時代中頃です。昭和の初めには終わっています。

石臼の製作工程を簡単に紹介します。石切り場でだいたいの形に荒どりして、なるべく軽くしてから家へ運びます。上臼は、ノミで皿のように窪めます。穴あけ作業では、上臼には穀物を入れる供給口を、下臼には心棒穴を、両側から彫って貫通させます。この作業のときに割れることが多く、7個に1個しか成功しなかったそうです。

合わせ面は、下臼をやや凸面、上臼は凹面に仕上げてすり合わせます。表面をなめらかにして、溝を刻んで完成です。（髙橋順之）



▲石切り場跡

国史跡 清滝寺徳源院　京極家墓所土塀修理
～ええ仕事しまっせ～

［山東町］

清滝寺京極家墓所は、近江源氏佐々木氏の流れを汲む京極氏の菩提寺として大字清滝集落の清滝寺徳源院にあります。

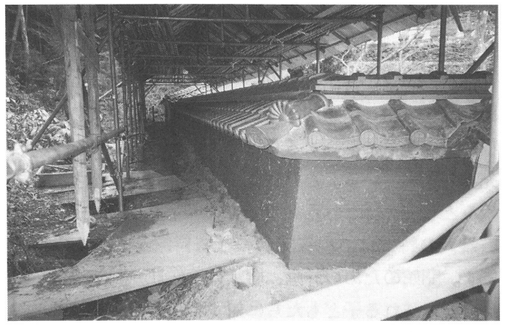
墓所は、寛文12年(1672)に22代高豊が歴代の墓を当所に整理したもので、周囲を土塀で囲み、上下二段の平坦地に鎌倉時代から江戸時代にかけての宝篋印塔34基のほか、五輪塔3基、塚1基の計38基の石塔が整然と並んでいます。

全国的にも数少ない中世から近世にかけての大名家の墓制を知る資料として、墓所全域が国の史跡となっています。

この修理は、永年にわたる風雪と近年の台風などにより、土塀・門などの屋根や漆喰が破損したので、昨年度から下段について保存修理を行っております。

修理は、土塀を解体し従来行われていた工法で積み上げていくもので、土塀の乾き具合を観ながら粘り強い作業が続きます。

今後は、国や県のご理解を得ながら、上段を含め周囲の土塀すべての保存修理を行い、多くの人々に訪れていただき、季節により様々な顔をもつ徳源院の魅力を感じてもらえたらと思っています。(桂田峰男)



▲京極家墓所

定納5号墳

［近江町］

前号でもご紹介しましたが、近江町では息長古墳群の詳細を明らかにする調査の一環で、定納5号墳の発掘調査を平成14年度より3箇年の予定で実施しています。

定納古墳は横山丘陵南端の尾根上に立地する古墳時代前半期の遺跡で、1号墳から5号墳までの5基の現存が確認されています。

今回の調査は、近江町教育委員会と大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター（兵庫県西宮市所在）が共同でおこなっています。

測量調査では前方後円墳と推定されていた5号墳ですが、発掘調査の結果、墳丘は方形をなすこと、また埋葬施設として2つの長大な木棺を用いていたことが判明しました。

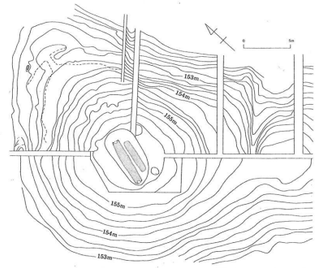
古墳本来の上部は一部を消失しているようで、墳丘の高さは現状で約3m、地山を削りだした後、上部1mくらいを盛土によって形づくられています。葺石・埴輪などは用いられていません。

墳丘の頂部からは、2つの長大な木棺を納めた埋葬施設が発見されました。西側の木棺は身の長さ5.4m、幅0.9～0.6m、現存の深さ0.3m、東側の木棺はそれよりもやや小さく、身の長さ3.6m、幅0.6～0.4m、現存の深さ0.2mとなります。

双方ともに「刳りぬき式木棺」で、既に木質はなくなっていますが、棺の身の部分をのせていた粘土の棺床がその痕跡をとどめています。また棺の底には朱色の顔料が全面に塗られていました。

棺の大きさや赤色顔料の状況からみて、西側の棺がこの古墳の主のもので、東側の棺は主と極めて近しい関係にあった人物のもの、ほぼ同時に葬られたようです。

この古墳は荒廃した里山の中の文化遺産を明らかにするために実施されており、調査終了後は、NPO法人やまんばの会の人たちとともに、周辺を間伐したり、伐材を粉砕して墳丘を被覆したりしながら、里山の中に眠る地域の文化遺産を整備していく予定です。



▲定納5号墳の墳丘